

龍南會の芽生え

江口俊博

高等中學校がまだ古城にあつた頃補充二級丁組として入學した人達が金蘭會と云ふものを組織して持寄りの原稿を其儘綴つて回覽して居つた。此丁組の世話役達は以前から懇意にして居つた連中だから僕達二三人が丁組でも無かつたのに無理に其組に入れて貰つて寄稿し回覽して居つた。處が元々金蘭會の機關雜誌だから一本調子の少年の頃免れない傾向として何となく仲間自慢見た様な文章が頻繁と掲載される、それが異分子たる僕達には段々鼻について來た。それで時々皮肉な評語も加えた。そうすると皆が氣に喰はぬ様子を、そこで更に反抗的に露骨に惡評を加えると云ふ有様になつてやがて到底同化し兼ねる状態を現出したので當然の處置として除名を申渡された。そこで僕達数名はこんな狹隘なものではいかぬ、もう少し快活な團體を作らうではないかと相談して稍反抗的に創立したのが研志會雜誌であつた、僕と今文科大學に居る村川君とモウ一人中島と云ふ三人が發起人であつた。會員を全校から募集して批評反駁勝手次第の自由論壇にしたいと思つたのである。忽ちの中に百余人の會員は出來た、考へると此頃の第五の校風は實に立派な堂々たるものであつたと思ふ、僕達は此頃補充一級であつた（七年制高等學校の二年生に當る譯だ）僕等より上級が三つもあつたと記憶するがこんな下級のチビ達の發起であるに係らず最上級の人達迄續々入會して呉れて熱心に原稿を出して呉れた、白石鉄牛、加藤本四郎、藤本充安、安東俊明杯と言ふ人達が頻りと論戰を交えて居つた。加藤本四郎君の本校建築論、白石、安東兩君ら數回に亘つて言ひ争つた男女同權論の如きは吾々少年には思ひも著かぬ思想で、只驚異の眼を以て迎えたのであつた、こんな風だから初めは金蘭會に對する反抗氣分から發起したのだつたら何時となく全然そんな風から脱却して頻りに學校を打つて一丸となす方面に活躍し出した。此雜誌が彼是二十號にも近づいた頃にボツ／＼校

友會織組の聲が聞え出した、此頃實は吾々七八人の同士が擊劍道具を持寄つて寄宿舎の横手の芝生の上で稽古をして居たのである。第二高等中學校には校友會と云ふのがあるそうだ。吾々もそんな會を組織する必要があるネ。幸ひ雜誌には研志會があり武術には擊劍會があり戸外運動には體育會と云ふあるから是等を基礎にしてやつては如何かと云ふ様な機運が動いたのを上級の連中が色々骨を折つていつの間にやら組織が出来てしまつた。其際に取つて一の挿話がある。初め各部の委員を定める時僕を何處へ持つて行くべきか部席は極らなかつた詰り取つてつけた様な専門も無かつたんだ。それで皆で冗談半分に投票して見た處が江口はマア文かなんて投票があつて遂に雜誌部に送り込まれた、下級生だつたもんだから此後約五ヶ年も雜誌部の居据りになつて居た爲にいつとなく學校の全局に通ずる様になり従つて學校を殆んど我物顔に考へる様になり隨分學科の方も怠け茶目もやつたが、一寸の間も學校の事を念頭から離れた事もなく今日諸種の仕事に就て隨分責任を感じる様になつた事は確かに此御蔭ではなかいと思つて居る。同時に少年の時から當局者の苦心と云ふ事に理解を持てる様になつて新聞雜誌が鋒を揃えて政府攻撃をやる様な場合でも先以て政府に同情して觀察する傾向がある。勿論諸君これを以て研究會見た様な萬年政府黨根性と誤解しないで下さい。

時代は丁度嘉納先生の時代であつた。第一回の委員會を開いて會の規則や何か、附議された時會名に對する評定があつた。校長は校友會と云つた様に有り來りの名を避け可なり永久的の意味ある名にしようではないかと提議された。一同賛成で先づ龍田山の南麓に位置するからと云ふので漢文式に龍陽會は如何だと發議する人があつたが龍陽董暨云々で此邊では少し困ると云ふ話になり彼は思ひ煩つたが寧ろ率直に龍南とやつてはと意見を出した人があつた。ソウダネまあよからう位の處で龍南會に決した。決した當時は龍南と云ふのは少し響が悪い様だつたが慣れて見ると龍南の方が龍陽よりも遙かに眞摯な風味があつて好ましい様と思ふ、僅かの事だけでも名前は相當に考慮してつけて置くべきものとシミク思ふ。

こんな恰好で芽生えた龍南會雜誌が早や二百號に達したと聞くと自分の兩鬚の霜も尤も千萬と思ふと共に龍南生活の懐しさごとシクと迫つて来る、僕の一生は全然失敗であつたと思ふが僕が龍南に學んだ一事丈は非常な仕合せであつと思ふ、アノ頃の

潤達な明るかつた生活は齡五十を過ぎた今日に至つても忘るゝことの出来ない且到底二び經驗し得られない尊いものであつたと思ふ。確か百號の時も追憶記を書いたかと思ふから今度も一つ思ひつきを書いて見ました。僕は今甲州の摺鉢の底に居るんですが、現在在學して居る諸君達のお力で此上ながら立派な校風を開拓して諸君の後より續き來る優秀の爲に良い路を設けられんことを祈ります。